



Title	Relationships between radiation risk perception and health anxiety, and contribution of mindfulness to alleviating psychological distress after the Fukushima accident: Cross-sectional study using a path model(内容・審査結果要旨)
Author(s)	柏崎, 佑哉
Citation	
Issue Date	2021-03-25
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1398
Rights	
DOI	
Text Version	none

This document is downloaded at: 2023-05-05T04:30:31Z

論文内容要旨

しめい 氏名	かしわざき ゆうや 柏 崎 佑 哉
学位論文題名	外国語題名 Relationships between radiation risk perception and health anxiety, and contribution of mindfulness to alleviating psychological distress after the Fukushima accident: Cross-sectional study using a path model (和訳 福島原発事故後の心理的苦痛に対する放射線リスク認知、健康不安との関連とマインドフルネスの寄与：パスモデルを用いた横断研究)
<p>福島原子力発電所事故による最も大きな影響のひとつは、心理社会的な影響である。放射線に対する不安は依然として存在しており、特に放射線の遺伝的影響に関するリスク認知は、メンタルヘル스에影響を及ぼすことが知られている。しかしながら、健康不安やマインドフルネスといった他の関連要因の役割は明らかにされていない。そこで本研究では、放射線リスク認知（遺伝的影響）が健康不安や心理的苦痛をどのように媒介するか、またマインドフルネスがこれらの変数にどのように影響するかを調査した。福島事故後 7 年時点において、福島県と東京都からそれぞれ 416 名、合計 832 名を対象に自己記入式のオンライン調査を依頼し、構造方程式モデリングを用いてこれらの変数間の関係をモデル化した。パス解析の結果、モデルの適合度は良好であり、放射線リスク認知が心理的苦痛に与える影響は小さく、むしろ健康不安がより強い影響を与えていた。マインドフルネスは、健康不安と心理的苦痛に有意な関連が認められた一方、放射線リスク認知とは関連していなかった。心理的苦痛に対する総合効果は、マインドフルネスが-0.38、健康不安が+0.38 であった。これらの結果から、放射線不安に焦点をあてた支援よりも健康不安と心理的苦痛を軽減するためのマインドフルネスに基づく支援の適用が有効である可能性が示唆された。よって本研究は、これまで実践された福島での地域支援活動の有効性を裏付け、災害後の慢性期におけるマインドフルネスを高めることの重要性を示すものである。</p>	

PLOS ONE, 2020, **15**(7), e0235517, <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0235517>.

学位論文審査結果報告書

令和3年2月15日

大学院医学研究科長 様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

【審査結果要旨】

氏 名 柏崎佑哉

学位論文題名 Relationship between radiation risk perception and health anxiety, and contribution of mindfulness to alleviating psychological distress after the Fukushima accident: Cross-sectional study using a path model

(PLoS One. 2020 Jul 6;15(7):e0235517.掲載)

申請者は、2011年に起きた福島原子力発電所事故後の被災者および東京在住の住民に対して、メンタルヘルス状況と放射線の健康影響に関するリスク認知との関連、さらにはそれに及ぼすマインドフルネスの影響について、ウェブ調査の結果から検討した。パス解析の結果からは、放射線リスク認知が心理的苦痛に与える影響は小さく、むしろ心氣的傾向を含む健康不安がより強い影響を与えていた。マインドフルネス因子は、健康不安と心理的苦痛に有意な関連が認められた一方で、放射線リスク認知とは関連していなかった。

放射線リスク認知と精神健康度（心理的苦痛）との関連についてはいくつかの先行研究があるが、いずれも全般的な健康不安を確認したものではなく、放射線リスク認知と精神健康度との間との直接的関連よりもむしろ健康不安との関連を強く示唆した結果は、今後の被災者の精神健康を考えるうえで重要な知見と考える。さらには有力な心理療法の一つと考えられているマインドフルネスの効果についても示唆されたことは、今後のよりインテンシブな心理療法的介入を考える意味で意義が大きいと考える。

以上より、本論文は学位論文として相応しいものであると報告する。

論文審査委員	主査	前田正治
	副査	坪倉正治
	副査	日高友郎